

マーケット概況（2024年4月）

4月の債券相場は、パウエルFRB議長の「利下げを急ぐ必要はない」との発言や国債買入オペの買入額が当月から減額されるとの観測を背景に、10年373回債は前月末比+1.5bpの0.740%で取引を開始した。2日の10年債入札を順調に通過し、翌日の国債買入オペにおいて全ゾーンで買入額が据え置きとなったことから一時下値は底堅くなった。しかし、5日発表の3月雇用統計や10日発表の3月消費者物価指数が強い内容となり米国の早期利下げ観測が一層後退し米国債利回りが急上昇すると、国内債券相場も続落となった。19日にイスラエルがイランに対してミサイル攻撃を行ったとの報道から急速に下げ幅を縮小する場面もあったが、その後イランが強硬な態度を取らなかったことからリスクオフムードは続かず再び軟調推移となった。26日の日銀金融政策決定会合当日には、外国為替市場で急速に進む円安を背景に日銀が国債の買い入れ縮小の方法を検討するとの一部報道を受け、一時10年374回債はカレントとして昨年11月以来となる0.930%まで、2年460回債は2009年7月以来の0.315%まで利回りが上昇した。しかし、会合後に国債買入について3月会合での判断を踏襲すると発表されたことに加え、総裁会見でも利上げに積極的な発言が見られなかったことから月末は買いが優勢となり、10年374回債は結局0.870%で取引を終えた。

<短国市場>

3M金利は先月からの好需給を引き継ぎ、月初の入札は最高落札利回り0.01%台での着地となった。12日の3M1225回債入札では最高落札利回り0.0111%と前回並みだったものの、在庫余利感から次第に売り優勢となりセカンダリーでは月末近く0.020%まで金利上昇した。9日の6M1224回債入札は、追加利上げ思惑が指摘されたものの玉確保姿勢が強く、前月とほぼ同水準の最高落札利回り0.0438%となり、セカンダリーでは0.025%まで金利低下した。1Y金利は前月と同水準の0.095%で取引されたが、18日の1Y1226回債入札では期間内の追加利上げ思惑が急激に強まり、最高落札利回り0.1747%と前月比で約5.0bp上昇した。セカンダリーでは投資家の買いが見られ0.130%まで金利低下し取引を終えた。

<一般債市場>

4月の定例地方債は、5年債と10年債がともに前月比1bpタイト化し、国債カーブ対比+8bpの条件決定となった。5年債は2カ月連続、10年債は昨年10月以来のタイト化となった。その後の政債・地方債の入札も強い結果が続くなど、タイト化の流れは継続した。事業債の発行額は前年同月比55%増の1兆8,156億円（61銘柄）となった。東京電力パワーグリッド3本立て債合計1,800億円など電力債の起債が相次ぎ、電力・ガスセクターの起債は合計3,666億円（16銘柄）と2022年9月以来の1年7カ月ぶりの高水準となった。

◎ 主要債券月間四本値

銘柄	始値	高値	安値	最終出来値
#374	0.760(2日)	0.740(2日)	0.930(26日)	0.870(30日)
#373	0.740(1日)	0.720(2日)	0.910(26日)	0.850(30日)
#363	0.515(1日)	0.515(1日)	0.695(26日)	0.625(30日)
#166-#167(5Y)	0.370(1日)	0.355(3日)	0.520(26日)	0.470(30日)
#187-#188(20Y)	1.520(1日)	1.515(1日)	1.700(26日)	1.650(30日)
#1217-#1224 TDB(6M)	0.043(9日)	0.025(9日)	0.043(9日)	0.040(30日)
#1221-#1227 TDB(3M)	0.000(3日)	-0.005(3日)	0.020(17日)	0.005(19日)